

## 「問い」を探索する授業者の「地域調査」

### ベルギー・オランダを例に

井上明日香（\*1）・中村 秀司（\*2）  
蒼下 和敬（\*3）・後藤 泰彦（\*4）

#### 1. はじめに

（蒼下）

平成30年公示の学習指導要領では、「思考力、判断力、表現力等」の育成がよりいっそう強調されている。これを受けて、新科目の地理総合・地理探究では、「内容」の各項目において「課題を追究したり解決したりする活動」を通して指導が求められ、さらに両科目のまとめにあたる項目では「課題を探究する活動」が求められている。これらの諸活動を実施するにあたっては、「問い」を含む「主題の設定」や「地域調査を実施し、生徒が適切にその方法を身に付けるよう工夫すること」等が求められており、より具体的にリアルな文脈の中での生きた学びをめざしている。

新学習指導要領における地理の2科目では、GISなどの地理的技能の習得が、課題解決的・探究的学習を進める上で重視されている。しかし、GISなどの習得は、私たち授業者を含めてハードルが低いものではなく、「GISを使ってでも詳しく考察し、自分で説明したり構想したりしてみたい」と思うような必然性（レリバンス）が高まらなければ、十分に習得できるレベルにまで達する生徒を増やすことは難しい。実際に、授業者自身にとっても、地域調査や地誌等の単元における授業の計画や評価問題等の作成の際に、対象となる地域等についての知識や理解、関心が弱い場合は、アイデアも出ず、結果として陳腐な内容に終始してしまうことが多い。

筆者ら4人は、学びの必然性（レリバンス）を高める一つの有効な方法は、具体的な「問い」を立てることであり、その素材となる具体的な「地理的事象」の発掘に努めることではないか

と考えた。そこで、実際にベルギー・オランダ地域において地域調査を計画し、実行し、これらのなかで見いだした気づきや疑問点を「問い」という形にしてみることにした（2019年12月）。筆者ら4人の教科指導観は統一されたものではなく、それぞれが自由な立場から授業や評価問題の作成に当たって、素朴に使えるかもしれないと思ったものを、各地域の報告の最後にくつか例示している。授業等で使用していただけるものがあれば幸いである。

#### 2. ブリュッセルとアムステルダム

（井上）

今回はフランクフルトで乗り継ぎ、ブリュッセルに到着したが、シェンゲン協定のため、到着時は入国審査もなく非常にスムーズであった。街中では公用語のフラマン語とワロン語の2言語表記が目立つ。ブリュッセルに限れば、多くの人たちはワロン語、フランス語を話す、両言語を話せない自分に英語で話しかけてくれた。彼らは英語も堪能である。ブリュッセルはヨーロッパの首都と言え、EU本

部（写真1）があることは有名だが、EUに関連する施設も多く、無料でEUについて理解を深めることのできる建物も作られている。旅の楽しみでもあり、教材として生徒の注目も集めやすい食べ物やブリュッセルでは充実している。街中ではお土産としてなじみ深いチョコレートやビール類の消費量がとても多く、朝の搬入を上から眺めることができたが、膨大な量を搬入していた。販売されているビールの種類も多く、ビール大国で



写真1

あることが分かった。また、街中で販売されているフリッツは日本のフライドポテトとは違い、太目でソースをつけて食べるが、これが殊の外おいしく滞在中に複数回食べた。

アムステルダムはダム広場や花市場、飾り窓などに観光客が集中し、にぎわっていた。オランダは自転車大国として知られているが、自転車専用道が作られ、現地住民と思われる人が多数移動していた。自転車の他に、トラムが充実し、車道が非常に狭い印象であった。治安が悪かった地区は再開発でオフィスビルなどが建設されていたが、伝統的な街並みを残している地域もある。また、観光客は運河を船で移動している人も多い。実際に街中を歩く時とは違った角度からアムステルダムの街を見ることが出来る。冬場は霧が立ち込めることもあるが、それもまた趣深い。オランダ人類学博物館は民族学に関する博物館であったが、これはぜひ訪ねたい施設である。メインテーマはジェンダーで両性具有についての展示であったが、展示の仕方が非

常に秀逸である。オランダの歴史的な背景や世界各地の文化などの展示も充実している。

「ブリュッセルにEUの本部が置かれたのはなぜだろう？」

「なぜベルギーではチョコレー

トの販売店が多いのか？」

「アムステルダムで自転車が目立つのはなぜだろう？」

「アムステルダムなどで水上交通が行われていた背景とは何だろうか？」

「オランダではなぜ花卉の取り扱いが多いのだろうか？」

### 3. ドルドレヒト (中村)

ところで我々は、道中頻繁にタクシースターの代わりに自動車配車会社であるTaxiを利用したのだが、強く印象に残っている運転手が一人いる。彼の名はEdi、お互いに出身について話している

と彼はシリアから来たと言う。それでシリアのどこなのかと聞いて、アレppoの返事があった時、我々は思わず閉口してしまった。聞けば、父母はトルコへ行き、家族は離散したとのことである。実際にTaxi運転手の大半は中東出身者のようであり、我々にとつ

ては紛争地域からの移民を間近にする貴重な出会いだった。

ドルドレヒトに着いたのはまだ16時だというのに、大変薄暗く、街の様子もよく分からない状態だった。スーパーマーケットで食料や酒類を例によって購入し、アパートメントで自炊し、酒宴を開いた。アパートメントは、オランダらしく通りに面しガラス張りのオープンな作りになっている。夕暮れ時に街を歩いても、オランダの人々は暮らしをオープンにしており、一部のプライベート空間を除けば、自室の一部もパブリック空間に暮らす様子がよく理解できた。ドルドレヒトは、マース川を臨む運河の街で、ホラント州でも最古の街である。実際に、小さなアムステルダムを思わせる様子があり、静かな運河や大教会、街並みを樂しむには最適であった。

翌日は、世界文化遺産キンデルダイクの風車群を訪れ、ポルダーの湿地帯を散策した。歩道を踏み外すとすぐに靴は泥まみれとなる土壌には、やはり木靴が必要であると実感する。さらに、即興でウェブ地図により近

くの村落を探し、すぐに確認できる路村形態の村落を突撃訪問した。後で調べるとアウト・アルプラス村落の一部であったようだが、ここでは列村に暮らす典型的なポルダーと酪農、家庭菜園を観察した(写真2)。ただ

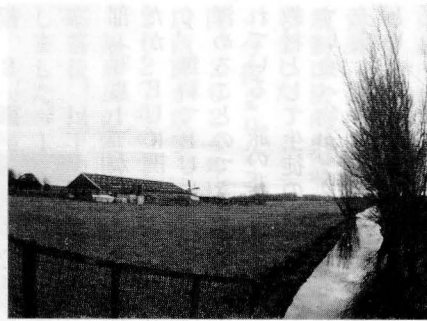


写真2

し、暮らしぶりは日本のように高齢者ばかりが中心の、都会から置き去りにされた村の姿ではなく、都市に暮らす人々との様々なデバインドは小さい。魅力ある地方が分散的に発達し、都市と農村がバランス良く配置され、暮らしを維持することの大切さをよく理解することのできる事例だろう。

「夜明けが朝10時前、日没が16時すぎ……オランダの夜が長いのはなぜ？」  
 「なぜオランダでは木靴が広がったのか」  
 「風車がオランダの代表的景観になったのはなぜか」  
 「なぜファディはオランダの地方都市で単身タクシードライバーをしているのか」

#### 4. バールレ・ナッソー (後藤)

ベルギーの国境からおおよそ5km。オランダ南部、北ブラバント州に「バールレ・ナッソー (Baarle-Nassau)」がある。

図1は、現地で入手した案内図に濃淡を施したものである。オランダのバールレ・ナッソー (濃色部) に、ベルギーの飛び地「バールレ・ヘルトフ (Baarle-Hertog) (淡色部)」が複雑な形状で浮かんでいる様子が読み取れる。しかも、飛び地の中に飛び地があることも確認できる。図1内及び周辺のオランダ領内に22カ所のベルギーの飛び地があり、その中に7カ所のオランダ領 (飛び地の中の飛び地) があるという。なぜ、こんな複雑な国境線

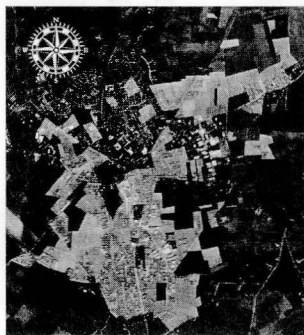


図1

が引かれるようになったのだろうか。住民の日常生活に不便はないのだろうか。

かつてはバールレという1つの村であり、ブレダの領主が支配をしていた。しかし、1198年にブラバント公爵と領有をめぐるトラブルが生じ、ブレダ王がバールレをいったんブラバント公に与え、ブラバント公は与えられた領地をローンの形で少しずつブレダ王に返上することになった。ところが、返上が滞り、現在のモザイク状の領有状態が出来上がったことである。のちにブレダ王の領地はナッソー家に渡り「バールレ・ナッソー (ナッソー領のバールレ)」、ブラバント公が持ち続けた場所は「バールレ・ヘルトフ (公爵領のバールレ)」と呼ばれるよう

になった。この時代は、神聖ローマ帝国の支配下で領主が異なるに過ぎなかったが、30年戦争などの歴史を経て、結果的にバールレは2つの国家の領土に分かれることになってしまった。

役場や郵便局は両国それぞれに設置され、警察署は同一の建物内で両国の警察官が机を並べている。では、住民はどうだろうか。さぞかし生活が不便であろうかと心配するところだが、寧ろこの地に住むことの誇りを感じ取れた。境界線上にある家や店は、「正面玄関のある方が帰属国であるというルール」のもと、この地ならではの生活を送っていた。かつては密輸の拠点として、EU統合による関税撤廃後は酒やたばこ、ガソリン等の税率差を生かせる場として、所得税に差が出たりルールや法の改正があつたりすれば、都合の良い方に玄関を付け替えるなど、地の利を最大限に活かしてきたようだ。さらに現代では、映えもする複雑怪奇な国境線は「魅力的な観光資源」として活用されているようだ。

国家は違えども同一のオランダ

ダ語圏、通貨も共通、シェンゲン協定によって往来も完全に自由。バールレは、EUや国家の概念を考えさせる上での絶好の街として、魅了し続けている。

「なぜ複雑な国境線がある街で不自由なく暮らせているのか」  
 「なぜ人々はバールレの地で誇らしく住み続けているのか」

#### 5. さいごに

(蒼下)

以上、4人の地理教員で地域調査を行い、その中で気づいたことや見いだした疑問を「問い」という形にしてみようと試みた。地域調査や地誌学習の部分では、生徒に学びの必然性を感じさせるためには、まずは授業者も必然性を感じる必要がある、そのためには生の経験……とはいかずとも、オーセンティックな文脈の中で、授業者自身が探求的な経験を通して授業計画や問題作成にあたるのが大切であると実感できた。

- (\*)1 神奈川県立川崎高等学校教諭
- (\*)2 鳥取県立鳥取西高等学校教諭
- (\*)3 山口県立下関南高等学校教諭
- (\*)4 千葉県立磯辺高等学校教諭